

第18章

SNSを心理学する（正木大貴）

1 青年期の友人関係

樺坂 46 「エキセントリック」 プロデュース・作詞：秋元康 作曲：ナスカ

あいつがああだって言ってた
こいつがこうだろうって言ってた
差出人のない噂の類い
確証ないほど拡散する

意外にああ見えてこうだとか
やっぱりそうなんだなんてね
本人も知らない僕が出来上がって
違う自分 存在するよ

何が真実（ほんと）なんてどうでもいい
わかってもらおうなんて無理なんだ
倒れて行く悪意のドミノ
止めようたって止められない

訂正したとこで
また同じことの繰り返し

もう、そういうのうんざりなんだよ

誰もが風見鶏みたいに
風の向き次第で
あっちこっちへとコロコロ変わる
世間の声に耳を塞いで
生きたいように生きるしかない
だから僕は一人で
心閉ざして交わらないんだ

I am eccentric 変わり者でいい
理解されない方がよっぽど楽だと思ったんだ
他人（ひと）の目気にしない愛なんて縁を切る
はみ出してしまおう 自由なんてそんなもの

これは櫻坂46の「エキセントリック」という曲の一節である。この曲はどういう思いを歌った曲なのでしょう？またこの曲を聴いて、この歌詞を読んで、みなさんはどう思いますか？

とは言っても、決して曲中の登場人物の心情を問うているのではない。それは大学受験の現代文の問題である。受験国語のテクニックを使えば、人物の心情変化などそれなりに読み取れるのであろうが、もうそんな退屈なお勉強からは卒業した方がよい。大学で学ぶ心理学はそんなものではない。真の学びは自らの体験からしか生まれないものだ。

高校を卒業して、大学に通うようになってから、生活環境がガラッと変わり、友達との関係や付き合い方もずいぶん変わったという人も少なくないだろう。中学・高校生の時は地元の学校に通い、顔見知りがたくさんいる環境のなかで学校生活を送ってきた人も多いかもしれない。また、小学校から高校までの授業は、クラス単位で行われることがほとんどで、担当の先生が教室を訪れて、同じクラスの生徒はひとつの教室にとどまっている。そうするとどうしても長い時間、同じようなメンバーが毎日のように顔を合わせることになる。このことによっていろいろな影響はあるだろうが、ひとまずそれは置いておこう。同じ友達と長い時間をともにすることで仲の良い友達ができやすかったかもしれない。

はたして、大学入学後はどうだろうか。まず生徒ではなく、学生と呼ばれる。「今までと何か違う」と感じた人も多いだろう。これは、単に環境の変化や教育の仕組みの違いによるものだけではない。実のところ、友達とうまく付き合うことができていると感じている学生は多い。そして自分は見知りであるという自覚を持つ人も多い。決して心を閉ざしているわけではなく、「誰か向こうから私に話しかけてくればなあ…」と期待して待っているのであるが、実際にはそんなことはまず起こらない。大体において、相手の方も同じようにそう思っているのだから。そうすると、普段あいさつくらいはして、ときには必要な情報交換もするという程度の友達はあるが、いっしょにいてじっくり話すような親密な友達はなかなかできない。本音を話せるような友達ではないので、実際に会って楽しく話をしていたとしても、その場の「空気を読む」ことを忘れてはいけなくて、なんだかとても気疲れする。だから、そんな気を使わなければならない人間関係であれば、寄らず離れずの適度の距離を置いておく方がよい。そんな風に考える人も少なくない。所詮、大学生同士の友人関係とはそんなものなのだろうか。

SNS（ソーシャル・ネットワーク・システム）は、現代青年にとって必需品である。いつでもどこでも、時間や場所を問わず、人とつながることができる。大学生を含む現代の青年の友人関係を考える上で、SNSを抜きにして語ることはできない。たとえ誰かといっしょにいたとしてもスマートフォン（以下、スマホ）でせつせつと文字を打ち込む姿を見ていると、決して人との関係を断ちたいわけではなく、むしろつながりを求めているようにも見える。実際に対面で話すのは気おくれするが、安全な自分ひとりの部屋や連絡相手とは離れた場所で、自分の好きな時間にSNSを介してコミュニケーションする方が気楽ということなのだろうか。

自分は友達と仲良くなりたいと思っているが、相手はそんな風には思っていないのではないか。LINEを送ってみたがなかなか返信もないし、既読もつかない。本当は迷惑しているのではないか。送られてきたLINEにすぐ返信した方がいいのか、それとも少し時間をおいてから返信した方が相手に負担をかけないですむのか。そんな友人関係の不安を抱えているのであるが、それを友達に話せば、それはそれでカッコ悪いし、友達に“ウザい”やつだと思われるかもしれない。多かれ少なかれ、現代青年は友人との間にある（と思いたい）目に見えないつながりに不安を抱きつつ、水面下で互いの気持ちを押し量り合っているようである。

さて、心理学では人間の一生のなかでこの青年期というものをどのように捉えてきたのか。エリクソン（1950）という心理学者は、人間の一生を①乳児期、②幼児期前期、③幼児期後期、④学童期、

⑤青年期、⑥前成人期、⑦成人期、⑧老年期という8つの発達段階に分けて考えた。そのうえで、人の成長・発達が加齢ともなって身体的な成熟と衰退が起きるというような見方をするのでなく、生まれてから死ぬまで「生涯を通して発達する」という視点を持った。これをライフサイクル論と呼ぶ。つまり、社会との相互作用によってわれわれは変化しつづける存在なのだということである。

青年期には、「自分とは何者か」や「私らしさって何だろう」という疑問にぶつかることがよくある。そしてそれらに対する答えを獲得していくことがこの時期の課題のひとつとされている。今では「アイデンティティ」という言葉は一般的に使われるようになったが、もとは青年期において重要な意味を持つ概念としてエリクソンが提示したものである。

思春期（青年期の少し前）には、自分は自分をどう見るかというような自己への意識が高まり、同時に他者から自分はどう見られているかという他者意識にも敏感になる。しかしそういった他者からの目による縛りを受けつつも、他とは違う固有の自己像を見つけようとする過程が青年期であり、深く自分を掘り下げていくこの作業は、言ってみれば垂直方向への広がりである。

一方、この時期のもうひとつの水平方向への広がりとは、やはり他者や社会との関係の構築である。自分を取り巻く周囲といかに信頼できる人間関係を築くのか、そして社会のなかで自分をどう位置付け、どのような役割を果たすのか。ライフサイクルの時期に応じて、関わりを持つ人やグループは変化し、そのたびに周囲の環境に適応していく。もちろん人生のどの時期においても、常に人は他者とつながりを持ち、他者とのつながりを頼りに生きている。なかでも就職というライフイベントを控えた青年にとっては、家族・友人・知人とのつながりが、これから自分が社会の一員として成長していくうえで重要な意味を持っていると言える。ところがこの垂直方向と水平方向の広がりとは両立させるのが難しい。自分という人間の個性を突き詰めれば、どうしても周囲との間にギャップが生まれるかもしれない。逆に周囲との同調やつながりを強調すれば、今度は自分らしさを失うことになりかねない。青年期の悩みは、このようなジレンマと関係していることが多い。

最近では、目立った問題を抱えているわけではないが、実は密かに学校や職場などの人間関係になじめないでいるという悩みを抱えている人が多い。周りに友人がいないわけではないのだが、腹を割って相談できるほどの関係にある相手がいなかったような隠れた孤独感を抱えているようだ。今の大学生はよく自分たちのことを「コミュ障」であると自嘲的に表現するのだが、決して筆者には、彼・彼女たちがコミュニケーション下手であるようには見えない。むしろ器用である。寄らず離れずの距離感を置く大学生同士の間関係は、そのコミュニケーション力を駆使することによって、少なくとも表面上は致命的な人間関係の疎外から自分を巧みに守っているように見える。

調べてみよう!

1. 自分と同年代の心情をうまく表現した曲にはどんなものがありますか？
2. 高校までの友達と大学生での友達に違いはありますか？
3. 家族、友達、恋人との関係で面倒だなと感じたことはありますか？どんなことですか？
4. 友達付き合いをする上で気をつけていることはありますか？

2 SNSのコミュニケーション

通信環境の変化は、友人関係の構築・維持におけるインフラの変化であると言われる（宮木、2013）。家の固定電話が通信手段の中心であった時代は、友人や恋人と連絡を取ろうとすると、だいたいはまず相手の家の親が電話をとり、それから本人にとりついでもらうというワンクッションが

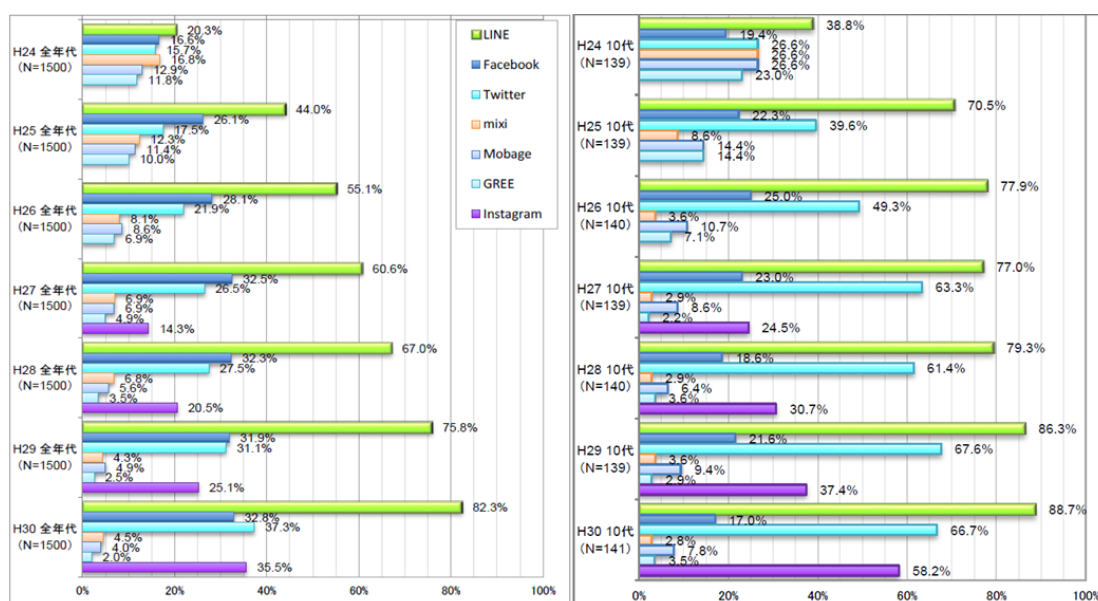


図 1 主なソーシャルメディア系サービス/アプリ等の利用率 (経年) (全年代・10代のみ)

あったものだ。その電話の後、親子喧嘩に発展するというのは当時の定番であった。(みなさんにはその理由がわかりますか?) その後、携帯電話の普及とともに若者たちの通信手段も変わり、自由な時間に相手と直接コミュニケーションできるようになった。多くの人がインターネット環境を共有するようになってからは、同じ趣味を共有する人が関連のサイトで交流するようになるなど、人間関係の構築手段も大きく様変わりした。

今日、10代以上のスマホの利用率が約9割近くにのぼり、ネット動画やオンラインゲーム、その他ソーシャルメディアを利用する人も圧倒的に増加している(総務省情報通信政策研究所、2019)。現代の青年を中心にLINEなどのメッセージ・アプリや、特にInstagramやTwitterなどのソーシャルメディアの利用が日常になり、以前の電話通話やメール中心のコミュニケーションとは全く異なった形態のコミュニケーションスタイルへと移行してきた(正木、2019)。

総務省情報通信政策研究所が行った「平成30年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」(2019)を見れば、主なソーシャルメディアの各年代別の利用率の経年変化を知ることができる。まず全年代で見るとLINE、Twitter、Instagramの利用率がここ数年着実に伸びており、なかでもInstagramの伸び率が最も高い。5年前と現在のデータを比較すれば、ここ数年でソーシャルメディアの利用状況はすっかり様変わりしたと言っていい。また、年代別にそれぞれのソーシャルメディアの利用率を見ても、各年代において利用率の増減の特徴はおおむね共通しており、前述の3つのサービスの利用率の伸びは堅調である。一方でFacebookの利用率は停滞気味である。とりわけ若年層に着目すれば、平成30年の時点で10代及び20代では、それぞれLINEが88.7%と98.1%、Twitterで66.7%と76.1%、Instagramで58.2%と63.2%である(図1参照)。特にInstagramは、平成29年の調査では10代の利用率が37.4%であったが、1年で20ポイント程も増加している。Instagramは、ここ数年若い世代を中心にシェアを伸ばしていて、今現在は高校生や大学生の層に限れば、すでにTwitterのそれを凌いでいるかもしれない。また性別によって利用率に違いがあることも予想される。(が、これは実際に調査してみないとわからない。調査したらどんな結果がでるだろうか?)

今日では世代に関わらず、多くの人がSNSを利用していることはわかったが、われわれは何を目的にSNSを利用しているのだろうか。6歳以上の“全年代”を対象にした総務省の平成30年通信利

用動向調査によると、「従来からの知人とのコミュニケーションのため」(87.4%)が最も多く、次いで「知りたいことについて情報を探すため」(57.4%)、「ひまつぶしのため」(35.3%)、「同じ趣味・嗜好や同じ悩み事・相談事を持つ人を探したり交流関係を広げるため」(22.0%)と続く。

同じく総務省情報通信政策研究所が“高校生”を対象に行った「高校生のスマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査」(2014)では、「友だちや知り合いとコミュニケーションをとるため」(71.8%)、「ひまつぶしのため」(52.3%)、「学校・部活動などの事務的な連絡のため」(48.9%)、「情報収集のため」(32.5%)、「周囲の人も使っている」(29.5%)となっており、上記の結果と微妙な違いがあることにも注目したい。ただ、いずれにしても実生活における友人や知人とのつながりの中で利用されている場合が多いようである。

またICT総研(2018)も同様のSNSの利用目的についての調査を行っており、それによれば、「知人の近況を知りたい」(39%)という理由が最も多かった。「人とつながりたい」(36%)がそれに続いた。また「自分の近況を知ってもらいたい」(22%)、「写真などの投稿を見てもらいたい」「自分の行動記録を残しておきたい」(いずれも19%)、その他「いいね、などのリアクションが欲しい」(15%)などの理由はいかにも今のSNS利用の特徴と言えるだろう。

2010年代に多数のソーシャルメディアが生まれ、その頃からフェイス・トゥ・フェイスの形ではないオンラインのコミュニケーションの価値が増してきた。例えば、Facebookが世界中で爆発的に広がったのは、SNSというメディアによって、直接会わなくても、まさにネットワークが網の目のごとく広がって、それまでは想像もしなかった数のまったく新しいつながりを持つことができるという特徴にあった。2010年ごろに北アフリカを発端にアラブ世界で起こった“アラブの春”は、このSNSが持つ人と人とをつなげる力が背景にあったと言ってよい。この例が示すように、もともとSNSには見知らぬ新しい人とのつながりを生み出すメディアであるという特徴を持っていた。

しかしそのときから比べてSNSも一気に多様化が進んだ。現在われわれは新しい出会いを求めること以外に、すでにある人間関係を維持したり補強するためにSNSの機能を駆使するようになってきたのだ。遠山(2012)は、ネット上で新たな出会いを求める人の他に、友人の数が比較的多く実際の人間関係を重視する人の中に、リアルな友人関係を維持管理するために積極的にSNSを利用する人たちが増えてきたことを明らかにしている。

先に挙げたSNSの利用目的に関する調査からもわかるように、普段SNSでつながっている人は、多くの場合実際の人間関係でも交流している人たちなのである。SNSのコミュニケーションの主たる対象は、会ったこともない見知らぬ人ではない。オンラインの人間関係とオフラインの現実の人間関係はかなりの程度重なっているのだ。このようにしてSNSを代表とするオンラインのコミュニケーションは、元来からの人間同士のコミュニケーションに変化を加え、そして身近な人間関係の構築や維持にも影響を与えてきたのではないか。ソーシャルメディア自体が持つ価値や存在意義のこのような変遷については、心理学的な視点にとどまらず、その他さまざまな視点から探究することができるだろう。

調べてみよう！

1. SNSをして楽しいと思うときはどんなときですか？
2. SNSで嫌な思いをしたことはありますか？それはどんなことですか？
3. 現在のSNS事情について調査したさまざまな統計データを探してみよう
4. (SNSに関するそのデータから)客観的にどんなことが読み取れるか話し合ってみよう
5. 身の周りにいる人たちのSNSの利用状況や目的を調べてみよう
(発展編)
6. SNSにハマっている人の(心理的な)特徴って何だと思いませんか？
7. それを調べるためにはどんな方法(調査方法)を使えばいいか話し合ってみよう

3 現実における人間関係とSNSにおける人間関係

大学生になったみなさんは、これから演習やレポート、プレゼンテーション、そして卒業論文などを通して、「ある物事に対するあなたの考え方や態度をわかりやすく説明しなさい」と何度も求められることになるだろう。言い換えれば、論理的思考を展開していかなければならないというわけである。もっと簡単に言うと、筋道を立てて自分の考えを深めていく必要があるのだが、それはどうすればできるようになるのだろうか。その方法にはいくつかあるが、今回は2つの相対する(ように見える)意見や見方を「対比」させて考えていくという基本的な方法を使いながら、議論を進めたい。Aという立場とそれに対立するBという立場をとときには具体例を提示しながら丁寧に説明することで、AとBそれぞれの違いが浮き彫りになり、両者の特徴がより明確になる。そのうえで「～という理由で自分はBという立場を支持する」とか「Bの方が優れている」としても良いし、「新しいCという考え方ができる」ということも可能である。このように理屈で説明すると難しく聞こえるかもしれないが、要は「日本とイギリス」や「人間とAI」、「アニメオタクとアイドルオタク」などのような異なった特徴を持っているであろう2つのものを比較するということである。

では「現実における人間関係とSNSにおける人間関係」について両者を「対比」させながら考えていきたい。まずは実際に顔を合わせてコミュニケーションをとる「現実における人間関係」についてである。SNSを介して行われるコミュニケーションで成立するような人間関係をオンラインの人間関係と名付け、それに対して直接対面で行われるコミュニケーションを基本とする人間関係をオフラインの人間関係と呼ぶことがある。オフラインなどというつながりが見えにくいように思えるが、対面で実際に人間同士がコミュニケーションをするとき、お互いに相手の反応を即時的に見て取ることができる。それにくわえて自分の表情や振る舞いといった非言語的なメッセージも相手にすぐ伝わるという特徴を持っている。SNSのオンラインでの人間関係に比べると、実際的な距離が近いのは明らかである。(それにはきつとメリット・デメリット両面があるであろう。考えてみてほしい。)

しかし、現代青年の友人関係のあり方は、お互いの距離が縮まるような深い関係になることに慎重であるとよく指摘される(土井, 2014)。筆者も、今の大学生の友人関係が寄らず離れずの微妙な距離感を保ちながら、器用に人間関係を維持しているという特徴があると先に指摘したところである。また宮木(2013)は、友人関係に対する意識について1998年、2001年、2011年に同じ質問内容の調査をして、その変化を見ている。それによれば、「多少の自分の意見を曲げても、友人と争うのは避けたい」や「友人との話で『適当に話を合わせている』ことが多い」とする割合が顕著に増加しており、友人との調和や同調することに気を配ることが年々求められている様子がよくわかる。

例えば、大学の授業やゼミでグループを作って、ある課題に取り組む必要があるようなとき、今の

大学生はたとえ見知らぬ人と同じグループになっても、協力しあいながら比較的スムーズに課題をこなすことができる。一方でその同じグループで食事に行くとか、ゼミのメンバーでゼミ旅行に行くということになると、途端に気が重くなり、本音を言えば「できれば参加したくない」と思う人も多い。ある程度、話題に枠組みが与えられている場合には意見することができるのであるが、ひとたびその枠組みが外され、プライベートの話を自由に話すような場面になると、「何を話していいのかわからない」、「自分の話をして引かれたらどうしよう」などと考えてしまって、当たり障りのない話でつなぐので精一杯になる。それにひどく疲れてしまうのだ。でもだからと言って誘いを断ってしまうと、「みんなからどう思われるかわからない」ので内心しぶしぶ参加の意志を表明することになる。

また現代青年が友人に対して示す「やさしさ」も特徴的であると思われる。例えばひどく落ち込んでいる友達がいたとする。その友達をどのように気遣うのか。何があったのかくわしい事情を聴いてその友道をなぐさめようとするのか、それとも泣いている涙のわけを何も聴かずに横にいるのか。今の高校生や大学生などのような若い世代の人たちは、概して友人に「やさしい」のであるが、それは相手に近づいてその人の気持ちを汲む「やさしさ」よりも、相手の気持ちにむやみに立ち入らない「やさしさ」、つまり相手を余計に傷つけない気遣いを優先する傾向があるのではないかということである（正木, 2019）。

このように、現実の人間関係は、距離が近いことで相手との違いが浮き彫りになりやすく摩擦も起こりがちなので、自分が傷つけられたり、相手を傷つけてしまうことがある。だからそれをなるべく避けるために、はじめから他者に深入りせずにある程度の距離を保っておくのである。そうすれば人間関係上の現実的で面倒なトラブルを最小限に抑えることができるという利点がありそうである。ただそのほど良い距離を維持するために気を使わなければならないことも多く、それはそれで面倒で疲れることもあるというジレンマもある。

では次に「SNSにおける人間関係」について考えていこう。内閣府（2017）の「平成29年度版子供・若者白書」によれば、他者と関わる際のインターネット利用について、「場所を問わないので参加しやすい」ことや「情報発信・収集の手段として活用できる」、「深く関わらなくてすむので参加しやすい」ということをメリットとして捉えているようである。もちろんここでインターネット＝SNSと理解するわけにはいかないが、これはSNSの人間関係を考える際にも有用だと思われる。われわれはインターネットやSNSなどのいわゆるオンラインのコミュニケーションを使って人間関係を維持しようとする際に、その特徴であるアクセスのしやすさや利便性、気軽さを重視していると言えるだろう。筆者は、この「参加しやすい」という利便性は、同時にいつでも都合よくその関係性、もしくはコミュニティから「離れやすい」という意味でもあると考えている。

TwitterやInstagramのようなSNSは、それぞれのフォロワーの多くが実際の知り合いであったとしても、基本的にその投稿は不特定でしかも多数の人たちに向けたメッセージであり、ときにはその内容が少々“盛った”自分の日常の開示であったりする。その投稿を見た人たちは、その「誰か」の投稿に対して、“いいね”をしたり、“リブ”を返したりという反応をすることもあるが、逆に反応をしないこともある（実際には目に見える形の反応をしないことが多い）。このように反応しなくても許されるのは、SNSのコミュニケーションが特定の相手を想定していないからである。実際の現実の人間関係では基本的にそれは許されない。リアルな友人との直接的なやり取りの場合、「誰か」の発言や意見に対して、目の前にいる特定の相手が何らかの反応をする必要がある。友人が何か発すれば、それがどんなものであれ、それに対して相手を傷つけないよう“適切に”そして“今ここで”「やさしい」反応をしなければならない。それが面倒であるとか、どのようにすればいいのかわからないという理由で、今の青年は自分には「コミュ力」がないと感じるようだ。それに対してSNSにはそういう制約がきわめて少ないのである。

例えば、自分のリアルな友人である「誰か」の投稿を見たにもかかわらず、それに何の反応もしなかったとしても、相手からはその投稿を私が見たかどうか確認しにくいので（できる場合もあるので厄介である）、‘投稿を見ていないかもしれない’と思わせる（思ってもら）ことができる。目の前で自分を無視されると傷つくが、SNSで必ずしも反応がなくてもそんなに傷つくことはない。“いいね”やコメントを返してくれる人は、自分を受け入れてくれて、面倒だとは思わない人であって、私はその人だけに語りかけたり、見てもらっているのだという体裁をとることが可能なのである。現実の人間関係で抱きがちな「自分は本当はウザがられているのではないか」「相手に面倒な思いをさせていないか」というような対人的な不安をある程度下げることができるというわけである。

TwitterやInstagramの他の特徴として、それほど難しいスキルを使わなくても発信するメッセージを自分で「加工」することができるということがある。芸能人や有名人は自分をPRするために、たとえば「自撮り」をSNSにあげることでセルフプロデュースすることがよくあるが、ごく普通のひとでも投稿内容をうまくコントロールできれば注目を浴びることもできる。外面的なものだけではなく、内面的にも見せたくないものや嫌な部分を隠すことが比較的簡単にできる。徹底的に良いところだけを見せつづけることも可能であるし、SNSはあくまで横断的で利他的な自己開示であるために、継続的な実際の人間関係では難しいような自己コントロールもある程度可能なのである。

改めてまとめると、SNSを介した人間関係の特徴は、いつでも参加しやすく、また同時に都合よく離れやすいうえに、適度に相手に反応したり無視したり、そして適度に自分を見せたり隠したりと、いずれにしても自分の都合で他者とのコミュニケーションをコントロールしやすいという点にあると言える。言い換えれば、人間関係において自分の関わりの程度を自分で自由に選択できるという都合の良さが、このSNSにおける人間関係の最大の強みだと言えるだろう。

調べてみよう！

1. あなたはなぜ（何のために）SNSに投稿するのですか？
2. 他の多くの人はなぜ（何のために）SNSに投稿するのだと思いますか？
3. 友達と遊んでいる最中にその場でSNSに投稿する…あなたはあり派？なし派？あり派 vs. なし派で議論してみよう
4. LINEの既読無視と未読無視…どちらが気になりますか？
2つのグループに分かれて議論してみよう
5. 現実における人間関係で難しいと思う点は何ですか？
6. SNSにおける人間関係で難しいと思う点は何ですか？
7. 現実の人間関係とSNSの人間関係の共通点と相違点について考えてみよう
両者それぞれのメリットとデメリットを考えてみよう

4 おわりに

はたしてわれわれはいつからこんなに個人の都合を優先するようになったのか。いや、元々そうなのか。また別の視点を持てば、個人の都合を優先することを望みながら、なぜ実際には周囲からの疎外を避けるために面倒な気遣いをするのか。人間は論理的でありながら、論理的でないことをする。その不可解さをおもしろがって探究するのが心理学という学問である。実際の現実の人間関係と比較する形で、SNSにおける人間関係について考えてきたが、この両者を比較する視点はまだまだ残っている。互いのメリット・デメリットなどについてもまだ十分に語られていない。ではどうすればこの

ような心理学的考察を深めることが可能になるのか。

それはまず自分の生の体験に敏感になってみることだ。はじめに述べたように、学びは自分の体験が源になっている。人と人の関係について深めようとするのであれば、自分が家族や身近な友達、恋人とどのような「思い」を持って関わっているのか、自分が他の誰かと関係を持とうとするとき、自分の「心」がどのように動いているのかということに興味を持ってほしい。もしかするとそれは自分だけに起こるものではないのかもしれない。そのようなまだ非論理的な“思い”程度にとどまっている個々の「心」がかき集められて、それらが論理的な“思考”によってつながったとき、バラバラであった「心」がある種の「理」（ことわり）を持って見えてくる。それが「心理」学である。

最後に改めて、みなさんは冒頭の曲「エキセントリック」をどんな思いで聴きますか？

調べてみよう！

1. 「○○ vs. ●●」のように比較するとおもしろいと思われるテーマの具体例を考えてみよう
2. その2つを比較するとどういう所がおもしろいのかも考えてみよう

引用文献

- 土井隆義（2014）『つながりを煽られる子どもたち-ネット依存といじめ問題を考える』岩波ブックレット 903, 岩波書店
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: Norton. (仁科弥生訳 (1977), 幼児期と社会みすず書房)
- ICT 総研 (2018) 「2018 年度 SNS 利用動向に関する調査」(<https://ictr.co.jp/report/20181218.html>)
- 正木大貴 (2019) 「SNS は人間関係を変えたのか？」『現代社会研究科論集：京都女子大学大学院現代社会研究科紀要』13, pp.123-136.
- 宮木由貴子 (2013) 「若年層の友人関係意識—通信環境の変化と友人関係で変わったもの・変わらないもの—」『Life Design Report』〈group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi/report/rp1301a.pdf〉
- 内閣府 (2017) 「平成 29 年度版子供・若者白書」(https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h29gaiyou/pdf/b1_00.pdf) (2018 年 11 月 20 日閲覧)
- 総務省情報通信政策研究所 (2014) 「高校生のスマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査」(www.soumu.go.jp/main_content/000302914.pdf) (2020 年 1 月 4 日閲覧)
- 総務省情報通信政策研究所 (2019) 「平成 30 年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」(www.soumu.go.jp/main_content/000644168.pdf) (2020 年 1 月 4 日閲覧)
- 遠山茂樹 (2012) 「大学生の友人関係とコミュニケーション・メディア選択との関連性に関する調査研究」『国際社会文化研究』13, pp.61-92.